



誹諧二冊

誹諧
二冊

5
2900

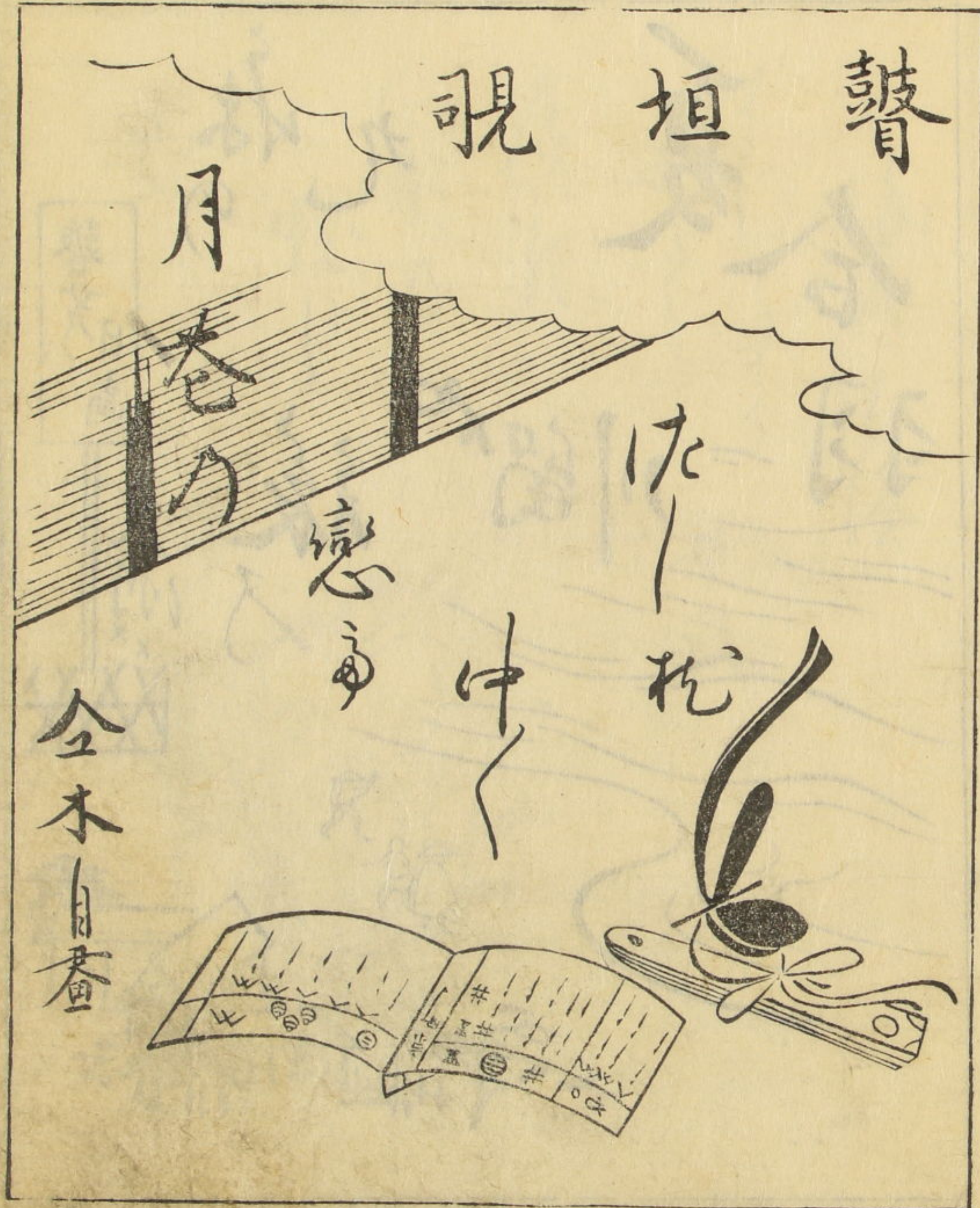


利5
2900











車僧



わがの
しん
しん
しん

牡丹

盗人
縄

しん
しん

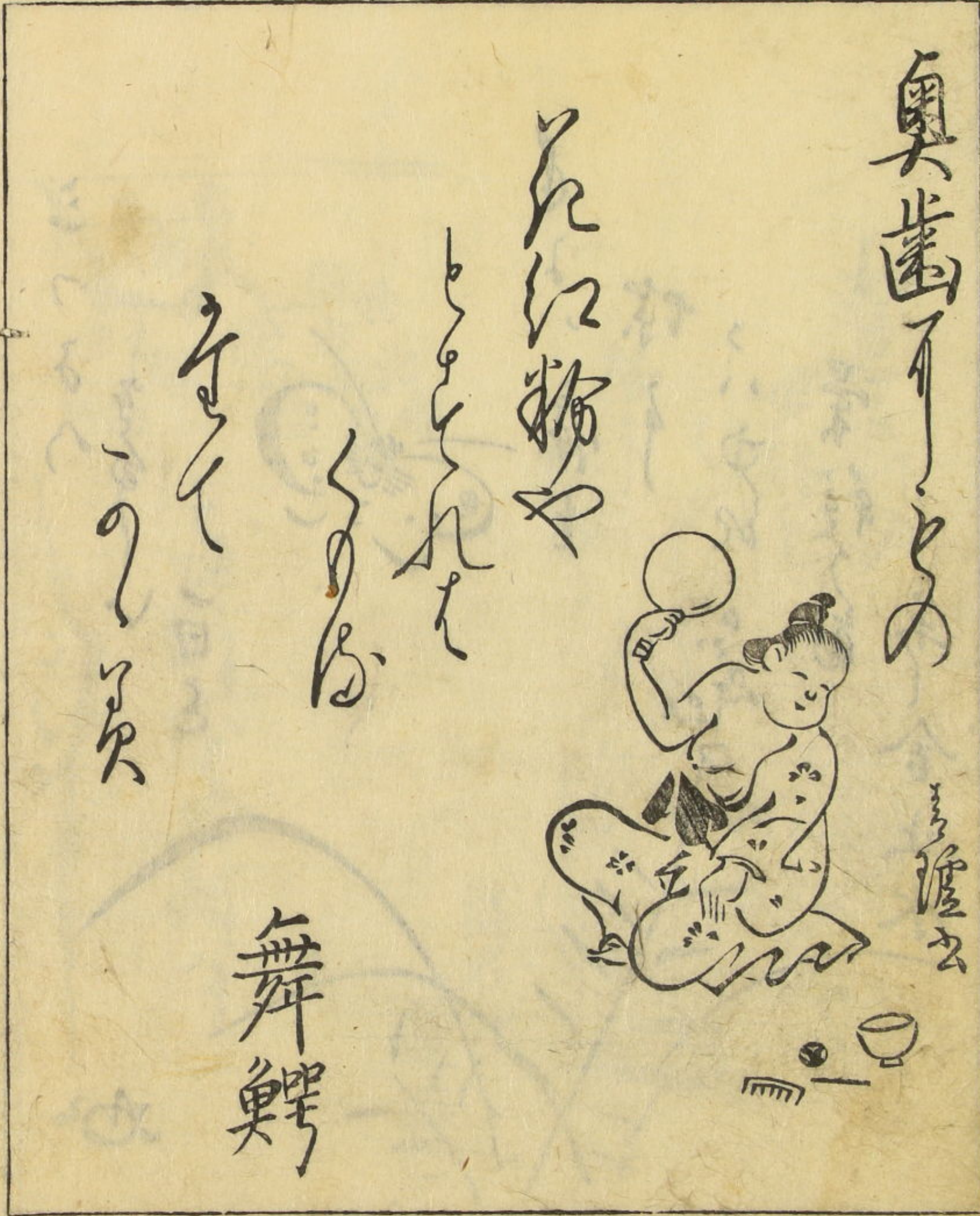
名
岸山
十軒

柿

一也









豆腐小後櫃

繪負き女

華や

田舎蔵

武州村山
蛙水

一世去



梅老
了類

茵擔子
梅子神

人台
白耳字
初三

馬
片去





大之様

末會式

花

儀

中次儀

來之



白鳳軒雪峯拜畫



うま村

熱村と福

身揚

河

河

河

月見の南

好古



雪峯画

盗人
負

家
土
産
也

陰乃
佐
之
也

教
師
也

池
永



菩薩の
人
の
入
り
は
佛
の
入
り
は
佛

竹
下

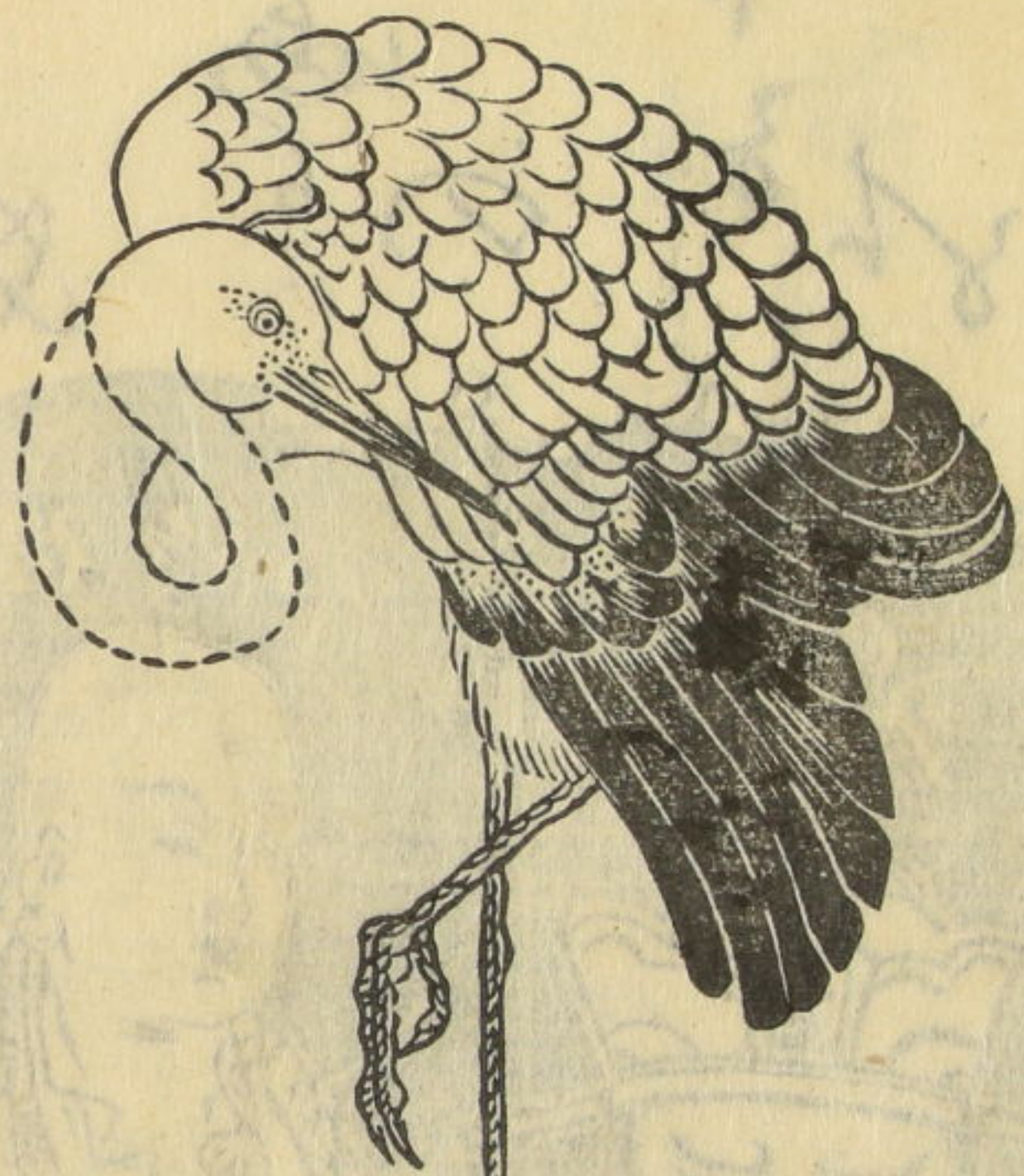
福の
輪
也
普
く
救
ふ
娑
婆
世
界



三
月
雨
の
日



人仁不接



河文續也

弋池画

丁卯

牡丹園

樓雲

西九水堂於

照月也

樓助

東本願寺

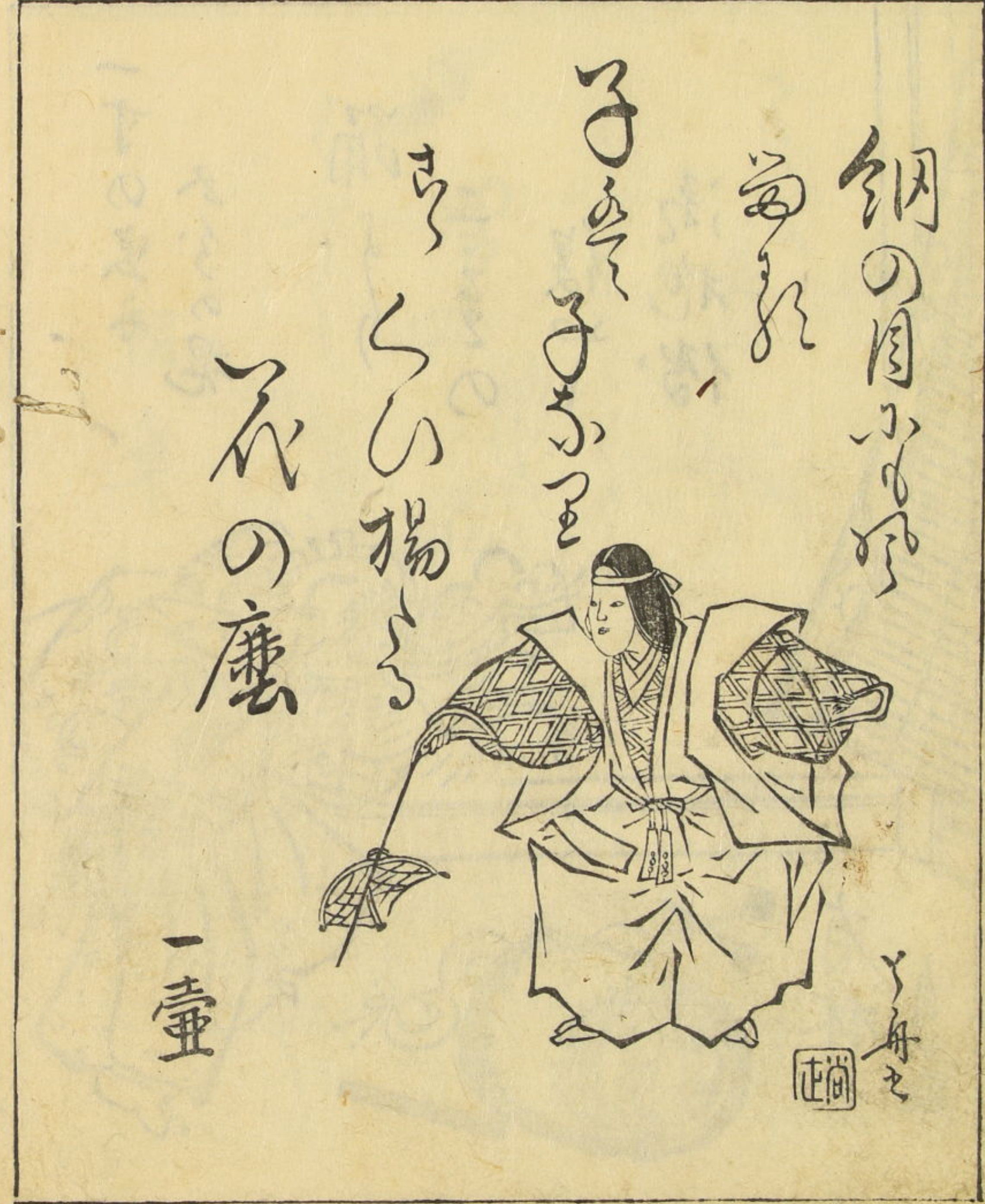
下五





いほ書
いほ書

洪谷
墨道



綱の目ふり
あまね

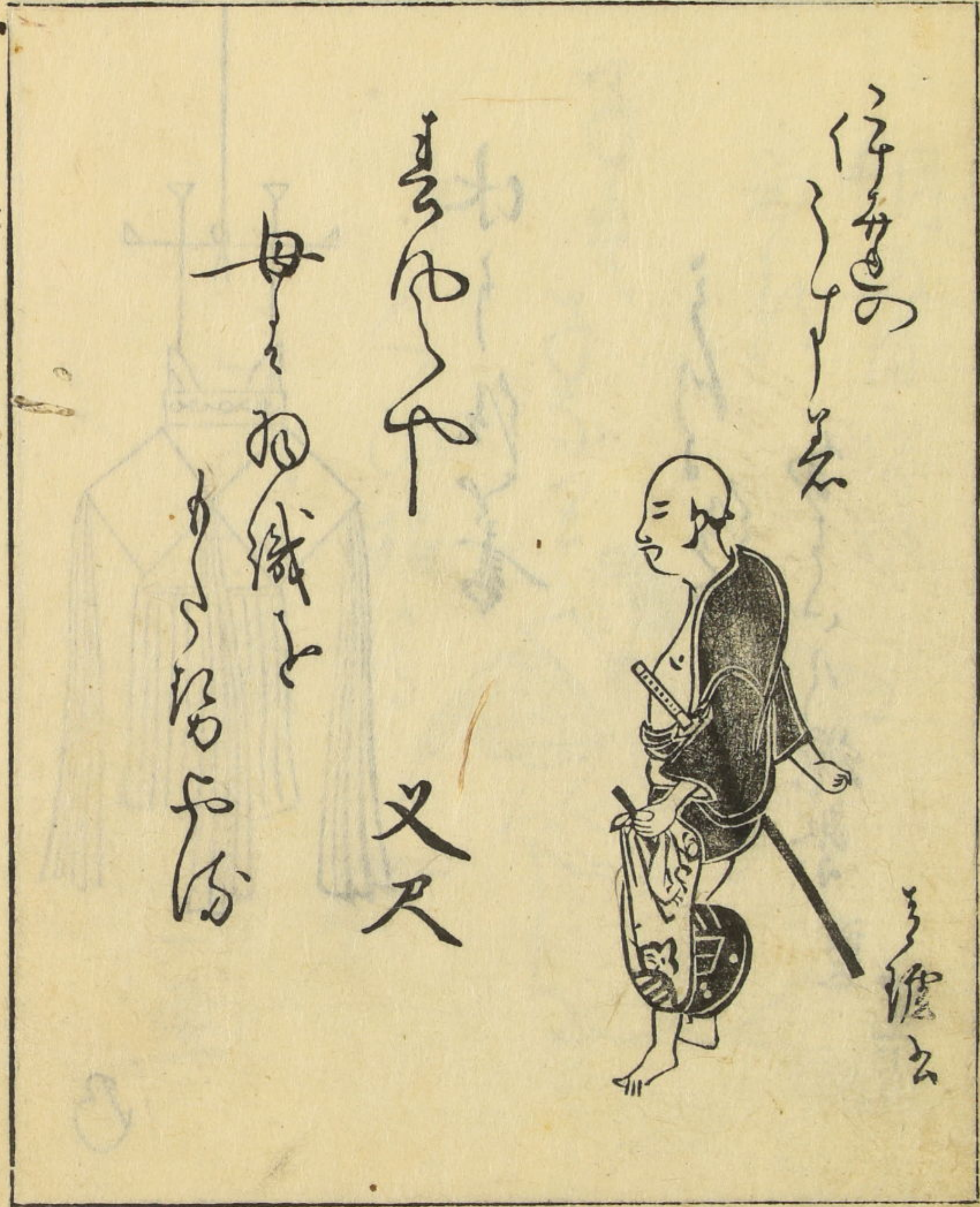
子

あけの揚

花の塵

と舟七
正尚

壺





蝶のあは

大工童の飯のこ

清藍戸
玉沾



玉沾

四季時侯順

歌仙

世の中は土脈厚くはるるる

何と笑ふそををの山

白うらまはぬやまの月い施る

我よりよき家亦は一偏

醒る付向ハ別 粟地を

輝り 窓めく 葦とまふり

何と云ふは 慈き如顔と候せり

沾洲

露月

橋沾

晋如

汶篁

旭洲

橋板

さん海と甥う市化と雨立

吟洲

被せ冬望に花白くお絞る

朝洲

小刀よ片人切難指のまう

沾永

翁宰懐牛茶平度物倍

來川

信衣紙掛し一夜の透地

執筆

ふてその内くさ笑て薄う

旭洲

木履雨くおお冬風

橋沾

恨くぬい男は好く着し

吟洲

所見と候しん気息く也

沾洲

凡し入る茶罐の光る門の花

晋如

山吹の淵のあり雲染

胡洲

盲人のよ女形う帰る

露月

常春に花よも茶の湯めん

來川

酒飯に中人座しう生如山

沾永

好織う好まじく後の送若

橋枝

歌よる先よきその美花冠

旭洲

海に舟をよも追舟の鳥

改筆

紅鷗う津飯し所と踏穿

沾洲

雪の影をうらみよる窓の月

梅

樓川

柳梅の雨あけの朝も何事なく

夕佳堂

蘭經

をそよ風の吹くまじくして梅の下

沾山

曙の白に融けし梅の玉

啓史

養人かゝる世の事知事と梅

蕉溪

伽羅利の月もはなれ梅乃屋

笠雲

表店のかげとの影をよみ梅

笠山

いつくもを梅のわきへ後

文雅

歌仙

止水

梅の香より玉露をくらひ若くは

露月

草履の影を瘦れし月

宗瑞

春のひまを花の便りりさよ

咫尺

二つもの物を花の影して梅の月

之悦

清きより破れし花の影を菊

華洲

世のうき世の静まりし梅の影

素丸

杉の影をらん梅の影をらん

執筆

不貫月遠ひなくくくを露月

露月

小橋ゆゆくあひわり歌

止水

瓦家よく^層と家よ日一雨の音

咫尺

懺と糸糸とあまやうれ作

素凡

足姪よりたれ一まの所般若桂

華洲

こく月とやれ牛とら坂

宗瑞

惟トやうけ子のめよ鳴鶴

止る

冬よおとれと神もあたら

之悦

月系より舞息何と花心

咫尺

水永い日と清と雲と

露月

十夜休へも寝儀とくれはま

宗瑞

尾う待りうと舞もあきら

華洲

おのこにたれはうを十寸鏡

素凡

涼しく眠れお千は猫

之悦

子傳へも糸のりもあきら

宗瑞

六角骨の日向とらり案

咫尺

悔拂て服戸一枚とらつあ

止る

橋立まあといとあきら

宗瑞

片湯の輪をと流の草島

之悦

月の流次くお湯女の姿

素花

送り大に燈は向もあつお湯

兼海

ナウ 寐ゆり貫れ履の世帯

山鳥

ぐらうくや回一ひかてき書ぬ

照人

江戸の伯父よりすじ根毛

宝珠

舟非時ちわの世へ住くとくらに

素花

緑の河舟のて板舟の東

露月

貞とろく征為きて巻るれや

兼海

洞管より耳へう流一と

之悦

表八章

初年やあつ海一梅の心也

文車

味後麻笥へ梅くくやも

露月

枝流は思ひつものも東はよ

老嵐

胃流を流くがり流く流

旦調

席書花中よ志此流の程き

志靜

あつとくく一層流くけ

山郭

露の月氣のそく流人の惟

超波

橋り香り流くくく産

執筆

柳

船江に花を置き舟へ坐くもの如く

青柳やありうらたも二三日

吹ぬ日を生れしもの柳は

去等亦ゆく縁へて居候

野々黄蝶

領春風

穩倉や今番代りの屋棟割

行おの我挑灯うり鳴帷

葉花はしる離りの目いとも

柴外

水宿

主高

宗瑞

來川

羊素

安士

葉の都令とてとて種のみ

雲月三日月

閑るは石階

盤花の縁地

吹懐系多とてあは花より二二梅

くお片とたはの吹もぬるの山

歡音の薨斜

東巖の天閣

唯

鳥の葉花風らうとてを成る

高の葉花のう人行高島院

篤信集

佳風

雲井

湖十

常仙

うう秋女の足のあるまじい山極
蝶をうくしむ河吸の秋体じの元
花堂奥屋より向へてさのまふ
も物にたとへるもさるゝのこ

圃月
芝英
桑楊
文香

春遊

久道红楼日已斜
柳色風起送落花

らる花乃ちあはれとてまのり節か

蒹葭

全

水門は静くそとて秋空の夜
山吹や花よ咲ともぬすこ
春風の夕了林一さき雪子の

菖翁
逸志
露月

長く秋

更年

し朝よりそとつる秋風

橋沾

享保甲子年より初復家の
書物といふものありしなり

道はくも冷きる月夜の秋

珪琳

松乃夢もあつてくつゝの夢は
暖みもあつてはくつゝの夢は
返もどくつゝ谷中一の夢は
夢もあつてはくつゝの夢は

青我
超波
長鶴
撰居

郭一云

同様の夢はあつてくつゝの夢は
考くくつゝは東東海も郭も
岩倉も夢はあつてくつゝの夢は
生夢もあつてくつゝの夢は

全木
山夕
一候
有佐

夢もあつてくつゝの夢は
妻も夢もあつてくつゝの夢は
舟もあつてくつゝの夢は
郭もあつてくつゝの夢は

潭北
維帆
文綸
木昌
平張

千重玉

夢もあつてくつゝの夢は

花もあつてくつゝの夢は
又夢もあつてくつゝの夢は

露沾
貞山

歌仙

卯のちやんとのし海をきりけり

舞しとく帰る様は雲はく

山里よりわたりし間を雲はく

孰やしらふ文字わたりし大

てお月も竹の葉はく

雲よも神よりしや雲はく

出まひよ多の好の好し人

ゆて茶室とく朝の三好く

赤坂のあつさの好し

日張りの好し

あまのよもよも

暖の居り

深草の好し

雲の身し

柳り者し

娘も姑も

花庭の波し

一曉夏
藤角

露月

麥阿

安士

珪琳

執筆

露色

來紫

財我

藤角

安士

露色

露月

麥阿

東紫

珪琳

安士

新に給もろくも

賦裁

永に日乃瀾中灰は冷めはく

友角

まゝにけうもあけ少僧如し

來紫

夕輝尔垂る人づる鞠衣座

露色

先づと書とられは意用

露月

多由くも算くも由の言新

孝河

長より真りのさあー大零

友角

古寺に茶粥と茶と切せく

桂琳

何處に篋は利く宰人

露色

目おれは海帯とど鳥の帽も

來紫

只に新いものもを好橋と

孝河

はくくも海月とかがおれん

賦裁

おのそくもを居る相の葉

安士

そくかゝい遠達らしく竿細

露月

坊ももも里い下りか送若

桂琳

出女に管をかくら戸よそれ

友角

あんきも里も中く居る二の足

賦裁

着る袖は加減のあはぬ花の所

露色

もつ堤もあつたんは

来紫

右

卯の舞の舞のあつたおあつた

牧子

黄色れ妻のちをばつた

晴川

川船は鼻の先へつた

古田

舟は船の側へつた

羽大

舟は船の側へつた

巨葉

津へつたとあつた

牧子

つた

晴川

好あつた

古田

好あつた

好文

おのひもつた

云系

好あつた

好子

好あつた

晴川

好あつた

古田

好あつた

好文

好あつた

言系

下

去月月を争うにや神も若る

晴川

彼岸の舟をいづ法の空

古由

新しき地と名ぬる車馬

好文

貞女の啼声もすさ海

古由

悪衣ふりし衣をあらうま

古由

繁ぬき洗ふるにわら

好子

石巻も刷毛の序の思持子

晴川

船をれくと神む日の御

好文

舟のぬきおほりわらわの産の時

好子

舟の笑ひせぬ座のい有

晴川

妻の走いし舟の心船の月

古由

舟の舟の舟の舟の舟の舟

古由

舟の舟の舟の舟の舟の舟

好文

舟の舟の舟の舟の舟の舟

古由

細くとも象指しけし腕をじ

好子

舟の舟の舟の舟の舟の舟

晴川

汗拭得てあふていれいれ

古由

舟の舟の舟の舟の舟の舟

好文

後次入之去就ハ留ル其妻也立
蕨薺や何事ハ隠ル一室
おぬり時節は牛年候はひり
源一い丸松の樹もくた
夜とあち一蓮ハ世人の憂
笑蓮ハこそ根を挿しや
多し川に玉ありし其後

尾谷
長菱^{少年}
芥翁
蟬之
宗瑞
露月
咫天

楳之部

楳書ハ落白行ハ其の裏

雪井

七ノヤ又何ハ玉ハ年能
寒れハこそ根を挿しや
送り大ヤ記ハこそ其の

尹祚
貞佐
青玪

色鳥

色鳥は籠てありハ鞠が皇

蘭經

若月

実法ハハ詠歌
おろしおひひ

清感何れハその色ハ久し
垣るハこそかりハ男ハ物冠

露沾
立圃

主何をいさ神月よりし妻

沾梅

夕月や指く海とる地の面

平洲

家悪き終人もわむじ月おく船

秀圃

月久く老ぬ枕を若い膝

潭北

一句兩辨

上八字一意
下七五言一意

海客帰ると海客入る海客はて後月

佳風

少来葉や又より流るん柱ら

琴臺

碓氷の河の世の鳴

露月

子福者の流る千色柱小舟

露月

化すか女いんを思ふ

芥翁

耳干や柳長く柱花枝よと

麥阿

冬之部

嘆り音を唯嘆石落の鳥

貞丸

鷓鴣の背よ多し柱河原を葉

催種

風や箕や簸はる女

莫尺

初糸よ刷色の弓矢射端小

標梅

冴る鐘死かぬ想嫁の影さる

泰鷗

沙よ柱連なるらる

芥翁

雲

りしる雲はよじりし雲のり

蘭經

秋香も吹んしは秋のおもも

露月

秋香よ不二の如國の人こ

仙水

深夜雨

鳥も唄はるる深夜の雨

橋沾

歌仙

一集八 嵯峨河清く

秋もあはれなる松の雲

両峩

世々直く清くは秋の雲

露月

雲は白くもその静も

青我

秋も去れど清くも

財峨

宵月秋は杵の宿は秋

撰居

月とらき海は未鬼の顔

青瓊

律宗の聲も秋の雲

超波

秋の雲も秋の雲

執筆

雲は白くもその静も

露月

秋も去れど清くも

兩峩

秋もあはれなる松の雲

青瓊

袖より身をそとに祝子
 ね子に新もく別し通り端
 栄標の伸も通より所波
 建立りふりし意せぬおし立
 河れんもその舞もお出舞り
 花と着おぬさるゝもの所せえ
 月よりおまていふんも星い日
 ありけおに仁王の身も舞は毫
 外言お上りしお河石雲車

撰后 賦後 露月 香娥 西我 詔波 賦哉 撰后

船持り人にお室よ苦方しん
 籍のさしともえお振る
 茶筥等もまは清し記おなり
 ころりも居るの敷も有増
 かまのけおくへお居るおのそ尾
 けくしおれもすりこまお眉
 刺髪お冠儀とお作ら言おし
 竜眼肉もとりおおその
 お河津ハ下谷ありし千代の好

撰后 香新 香娥 毒月 香我 賦後 撰后

芭蕉てもおくはさかしのし
 角ふ子やふの字はむき牛乳
 敷う腕へ右う角出た
 面挿うううか海一う平の信
 鶴日和う非老ふさうい
 久歌ふあ清光うはのあき
 未ふあやもえはとさううは

あま
 喜
 超
 青
 赤
 成
 撰

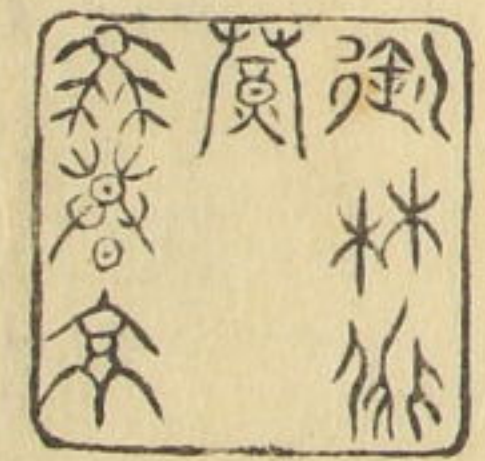
俳諧二重深跋

有書者則序之跋之有帛者
 則深之濟之矣于茲有_二重
 深之撰五重斬露月_カ深_メ出
 而當_ニ風之仔_リ達_テ深也以前_テ篇
 之數部_ラ為_テ下_ニ深_ト撰_テ後_ニ人_ノ之_百

章^{ラス}為^ニ上^ト濤^ト而^ニ遂^ニ投^テ刺^テ刷^テ氏^ニ為^{ナス}
 染^ラ上^ラ矣^レ而^レ染^ラ工^ル畢^ル矣^レ使^レ多^ク書^ス
 上^ラ繪^ラ多^ク雜^ニ眼^ハ衰^ハ筆^ハ老^ハ不^レ敢^テ拒^グ
 之^ヲ情^ヒ變^ラ黷^ラ把^テ鼠^ヲ鬻^ラ明^ニ其^ノ形^ヲ界^ラ
 朗^ニ其^ノ色^ヲ豔^ラ而^レ以^テ修^ス飾^ス矣^レ伏^ク冀^ク
 此^ノ染^也也^ト流^ク行^ク都^ニ鄙^ニ無^ク貴^ト無^ク賤^ト

于^レ暗^{ハレ}于^レ熱^ケ困^ニ乏^ラ而^レ永^ク不^レ渝^ク矣^ト
 呵

享^ス保^ス甲^ニ寅^ニ夏^ニ六^ニ月^ニ貞^ニ麻^ニ呂^ニ書^ス
 於^レ作^レ西^ニ催^ス暮^ス亭^ニ



下三十七

撰者

豊嶋治左衛門



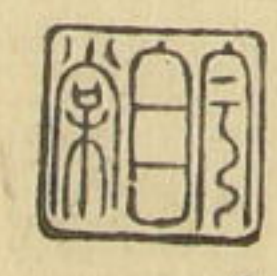
同

彌右衛門



彫工

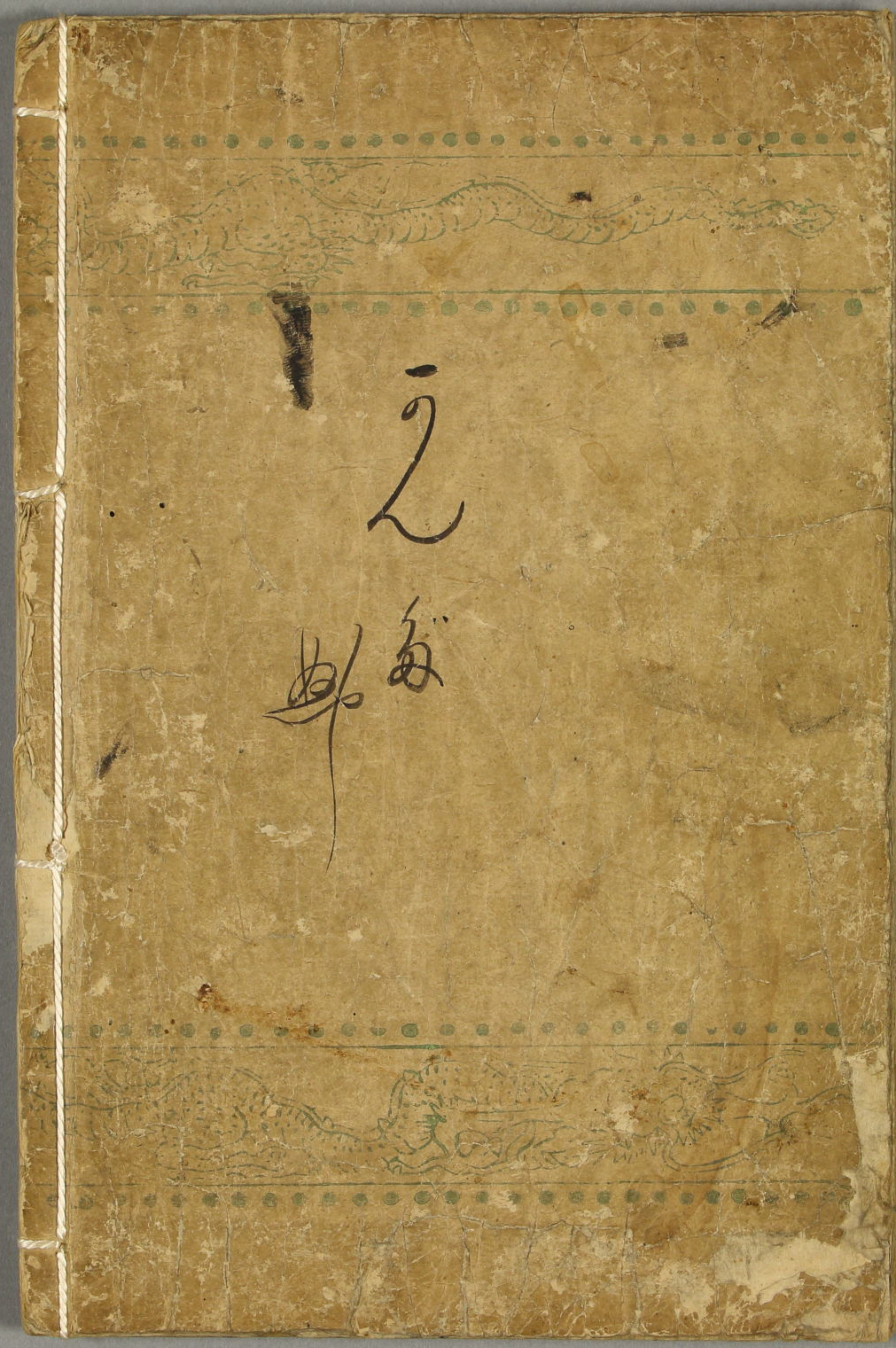
吉田治郎兵衛



江戸日本橋南通寺下目

外屋五郎右衛門開板

Faint bleed-through text and several faint seal impressions from the reverse side of the page.



之 毎